

全国邪馬台国連絡協議会会報

邪馬台国新聞

発行所 全国邪馬台国連絡協議会事務局
 発行者 鷲崎弘朋
 〒105-0013 東京都港区浜松町2丁目2番15号
 浜松町ダイヤビル2F
 Tel. 090-3218-8622
 URL <http://www.zenyamaren.org/>
 E-mail info@zenyamaren.org

会報「邪馬台国新聞」

第7号の発行によせて

会長 鷲崎 弘朋

〈速報〉纏向桃種年代はAD1355～2300年

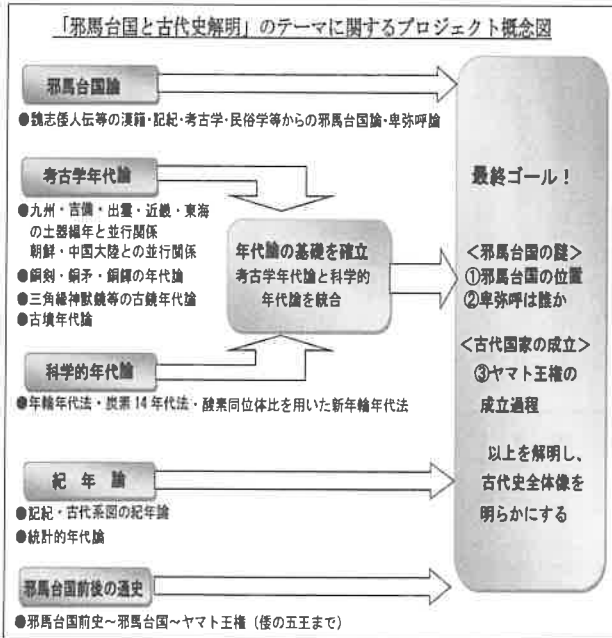
5月14日、纏向学研究センター紀要『纏向学研究』第6号で、2010年に纏向遺跡で発掘された桃種(核) 2769個の炭素14年代が発表された。名古屋大学測定の内2個は炭素年代1806～1865BPで平均1824BP、これを国際較正曲線で実年代(暦年代)に換算するとAD1355～AD2300年を示した。また山形大学測定の内2個は1803BPと1837BP、他に瓜種1個は1806BPを示した。同一地点からの桃種が複数機関で同時に測定され非常に価値がある。ただ、実年代で約100年幅もあり、邪馬台国との関係は大型建物と土坑の年代前後関係等も検証する必要がある。較正曲線の問題は依然残る。名古屋大学は国際較正曲線INTCAL13のみを表示し、山形大学は日本産樹木較正曲線JCALも同時に図示する。

桃種1803BP、1806BPや瓜種1806BPは、JCALでは3世紀末～4世紀前半の可能性も相当ある。もともと、国際較正曲線は地域性から日本の適用は問題とされ、日本産樹木較正曲線の作成が進められてきた。発表されたばかりで、当会として以上の点を含め検証したい。なお、マスコミ報道は当会HP「新着ニュース・トピックス」に纏めたので参照下さい。

1. 当会の設立趣旨の原点に戻ろう

「邪馬台国と古代史証明」を掲げ2014年に発足した当会は4年が経過し、この5月17日で個人正会員372名、19団体会員(所属約18,000名)、特別顧問26名、全国4支部体制(東京、近畿東海、中四国、九州)を展開しほぼ順調に発展してきた。ただ、最終目標の「邪馬台国と古代史証明」はまだ遠いと言わざるを得ない。2018年度は初心に戻り、真実に一步でも近づこうと会員個人々人としても前進しましょう。

解明の主要テーマは、①「邪馬台国論(位置論と卑弥呼論)」、②「邪馬台国前後の通史(ヤマト王権の成立過程)」、③「古代年代論(考古学年代論、科学的年代論、紀年論)」、④「民族のアイデンティティと古代史」で、このプロジェクト概念図は左記の通り。



2. 重要テーマでのワーキンググループ(WG)設置

①年輪年代と科学的年代論：鷲崎会長がリーダー
 A：纏向遺跡の桃種の年代測定が出たので解析や当会の対応を検討する(WG：鷲崎、内野副会長、菊池事務局長、藤盛顧問)。
 B：岡山県上東遺跡の桃種9,600個のC14年代測定も検討。また、酸素同位体比を用いた「新年輪年代法」による遺跡・遺物の年代測定(地球研の中塚武教授)も検討。

②庄内式土器研究：菊池事務局長がリーダー・西川修一先生を顧問
 ③漢鏡7期の研究：石井好氏がリーダー(サブリーダー：白崎勝氏)

3. 全邪馬連の拡大強化と財務体質改善

現会員372名は、早期に400名突破、将来500名を目指す。会の基盤は会員で、各種大会やイベント開催の頻度をあげ古代史愛好家・研究者との接触機会を増やし会員獲得を図る。

4. メディア戦略の一層の充実

①HPの「私の邪馬台国論・古代史論」は既に100論文近く掲載され、好評で更に推進。②メルマガの更なる充実。③会報「邪馬台国新聞」の継続。

以上

各支部活動報告

近畿・東海支部活動報告

近畿・東海支部支部長 井上 修一

第四回全国大会を開催して
高橋章さんを偲ぶ

近畿東海支部では、平成二十九年十一月十九日に全邪馬連の第四回全国大会を開催した。

石野博信、関川尚功両先生にご講演をお願いし、「纏向遺跡と箸墓古墳を見直す」というテーマで、奈良市東大寺のミュージアム併設会場で半日の歴史講演会を開催した。結果的には定員三百名を越す大入りの聴衆で、興行的には成功といえるのだろうが、実はこの開催に当たっては様々な経緯があった。そもそも関西で全国大会の開催を行うのが是か否かという議論から始まったのである。というのも、関西在住の歴史ファンならご存知だろうが、関西では毎年秋には多くの団体(大半は行政など公的な機関)が行う講演会や歴史イベントが目白押しで、しかも大半は無料である。講師には、著名な考古学者や歴史学者も多い。邪馬台国論はまず近畿説で充満している。そんな中、あまり知られていないボツと出の歴史団体が、しかも有料で講演会などを催して、果たして参加者はあるのかと言う訳だ。おまけに、常時例会に参加している十数名の会員達はサラリーマンかそのOBで、行政や文化財関係にコネのある人など一人もいなかったし、こういうイベント開催に参加した経験のある人も、私を除けば皆無に近かった。

私はIT業界で営業職だったので、IBMや東芝といった大手と組んでよくセミナー・ショーや講演会を行っていたので、大体どんな段取りで何をすればいいかはほぼ理解していたつもりだったが、他の会員の皆さんはそうではなかった。「体制的に無理じゃん」と、本部に全国大会返上を申し出ようと言う声もあった。数回の例会を通じて結局、関西で

催しようと言う事になったが、決まっていたから早かった。

テーマを決め、それぞれ分担を決め、ポスター・チラシ印刷、会場選定、講師選定、会計作業等々を進めていった。各方面との渉外は私と副支部長の飯田さんで行った。東大寺、春日大社に特別講演をお願いし、奈良県、奈良市、奈良新聞、奈良テレビへ幾度となく足を運んだ。看板製作、撮影担当、DM発送等々と、会員の皆さんは新しい業務に興味を覚えたのか嬉々として作業に励んでくれた。

そして迎えた講演会当日、定員三百名の会場に三百七十名ほどの入場者で、一部は地下のビデオ室で拝聴いただく事になって大いに恐縮した。講演は両先生による纏向遺跡、箸墓古墳の年代論が中心だった。

4世紀以降とする関川先生と、邪馬台国時代とする石野先生の議論の応酬で、講演後のQ&Aも含めて大いに盛り上がった。アンケートの集計結果では邪馬台国畿内説支持が60%弱、九州説支持が40%弱、その他がわからないとなっていた。講演会全体の印象も、満足、ほぼ満足を含めると80%近くになった。石野先生提供による、両先生共著の発掘調査報告書「纏向」の抽選会、関係者による懇親会と、全国大会は一応の成功を納めて終了した。

全国大会から一ヶ月後の、反省会を兼ねた近畿支部の忘年会に、会員の高橋さんが姿を見せなかった。大会の成功を人一倍喜び、当日はポスターを広げて会場前に立つなど、参加者勧誘に励んでくれた高橋さんだったが、忘年会には参加すると言っていたし、連絡なしで来なかったことなど今まで一度も無かった。携帯の電話にも出ないし、連絡もしてこない。一瞬不吉な思いも胸をよぎったが、忘年会は大会の反省会が盛り上がりつつ終了した。その後も高橋さんからの連絡は無く、みんな大いに心配していたのだが、もし異変があればご家族から何か連絡があるだろうと思っていた。

その後会員の矢口さんが、高橋さんが朝日新聞を購読

いたのを思い出し、高橋さんの住む伊丹市の朝日新聞の販売所に連絡を取ってくれた。販売員は数日新聞がたまったままだと言い、警察官立ち会いで高橋さんの部屋に入った所、高橋さんは亡くなっていたのである。高橋さんが独身だったのも、我々はその時初めて知ったのだ。

十二月の十四日に忘年会を行ったのだが、その一週間ほど前、全国大会から二週間ほど後に、すでに高橋さんはこの世の人では無かったのだ。衝撃だった。

大いに議論を交わし、談笑の中に酒を酌み交わした歴史学同好の友人が、いきなり逝ってしまった。寂しかった。悲しかった。急性心不全という事なので、我々が何かをできることは無かったとしても、本当に残念である。もうあの笑顔に接する事ができないと思うだけで、たまらない寂寥感に襲われる。

全国大会の成功と高橋さんの死去。平成二十九年は我々にとって、いつまでも忘れられない年になった。高橋さん、やすらかに。



高橋さん、色々ありがとうございました。
安らかに眠ってください。

中国・四国支部活動報告

中国・四国支部支部長 田中 文也

全国邪馬台国連絡協議会中四国支部の取り組みと今後の展望
二〇一七年度の中四国支部の活動の概要と日本古代史の謎の解明に重要と思われる点を報告したい。二〇一七年度の主な活動は、4月から7月初めにかけて都合六回の古代史講座と3回の古代史ツアーを開催した。講座は、第一講義は田中が担当し、第二講義はそれぞれの地域や分野から研究者を招いて外部講師による講義で構成する二部制の講座として企画した。神話・伝承、考古学、歴史学など様々な最新の研究成

難しい記紀や風土記の神話及び地域に昔から伝わってきた伝承等を研究している個人や団体を対象に作った日本で2つ目

古代史・神話ネットワークは、全邪馬連に参加が



田中代表(右)の報告を聞く参加者

古代史や神話の研究グループでつくる「古代史・神話ネットワーク」の立ち上げ総会が21日、米子市尾高のシャトーおだかで開催された。県内外から27団体が参加し、邪馬台国論争や地域に伝わる神話について報告した。日本古代史黎明に向けて情報を総合的に検証する仕組みが必要と、山崎古代史研究会(永井徹会長)が呼び掛けた。古代史分野の全国組織は全国邪馬台国連絡協議会に続いて二つ目。同研究会の田中文也代表が基

調報告し、「世界の中でも日本の古代史だけが不明のまま。謎を解くためにも、全てのデータを総合的に検証する仕組みの構築が必要だった。民族のアイデンティティーを確立することが目的」と創設の狙いなどを説明した。このほか4団体がそれぞれの活動を報告。同ネットワークは年1回、研究集会を開いて情報交換を進める方針で、初回は11月に予定している。(櫻部ちぐみ)

果が報告され充実した内容となった。特に、手間で赤岩、いて大國主命が亡くなった伝承は、山の中でたたら製鉄を行った折りにケラを落として割っていた現象を示唆しているのではないかといった仮説や、陰陽道に沿って記紀は書かれており、これを基礎に読み解くと解明できるといった仮説、又国譲りの交渉の最後に降り立った武御雷が休息した腰掛岩が残されている場所の確認など貴重な成果と報告が相次いだ。三回実施した検証ツアーは、外部講師にそれぞれの地域を案内していただいた。

続いて、七月二日に「古代史・神話ネットワーク」の設立を行った。二八の個人団体の参加で設立総会を開催し、田中が設立の基調報告を行い、東京・岡山・島根・鳥取の各地からの報告を受けた。

の全国組織である。記紀神話の約八割は山陰地方で占めており、これと対応するように、中国地方には記紀神話と連動する伝承が各地域に色濃く残っている。又、これを守り語り継いでいる団体や個人が相当数存在する。しかし、これらの情報の多くは無くなりかけており、今保存し記録する作業を行わない限り早晚消失すると思われることから、このネットワークの活動は大変重要な意味を持つことになる。

続いて九月一八日には、副支部長の近重氏や岡山歴研の仲間が、西谷墳丘墓に吉備の特殊器台が祀られていることを再現するため、吉備で作った特殊器台を搬入するイベントを開催し、山陰からも参加した。この企画では講演会も行われ、特別顧問の松木先生の講演を拝聴した。又出雲弥生の森博物館の学芸員の報告では、特殊器台の搬入ルートが鳥取県の日野町日南町を通っており、高麗天皇と吉備津彦と倭迹迹日百襲姫命のルートとの関連性を考えさせられた。

一月一九日・二十日には、奈良で開催された全国邪馬台国連絡協議会第四回全国大会に山陰から八名のツアーで参加した。大会は盛会で第二会場での視聴となった。内容は既存のものであったが、纏向遺跡から出土した土器の数の訂正が会場で行われた意義は大きいと感じた。翌日は奈良の遺跡巡りを行い帰途についた。

同一一月二五日・二六日の二日間に渡り、全国邪馬台国連絡協議会中四国支部と古代史・神話ネットワークの共催で、第一回古代史の集いを、鳥取県日吉津村で開催した。

萩山・因幡・岡山・島根・鳥取中部・鳥取西部から都合七題の報告を受けた。一日目の研究発表と夜の交流会と二日目を合わせて延べ一〇〇名程度の参加であった。たくさんの方の参加と個人で交歓し連携を深められたことは今後につながる大きな成果である。

二〇一八年度の活動の方向性の第一は、二〇一七年度に設立した古代史・神話ネットワークと連携して「古代史の集い」

を毎年開催することである。この集いの開催と継続は、今後の日本古代史の解明にとつて必ず必要となる作業である。記紀と連動する地域に眠っている膨大なビッグデータ群の収集を行い、これと考古学や民俗学や自然科学のデータ群との照合を行えば、やがてこの国の歴史の謎を解明する糸口が必ず見つかるはずである。すでに二〇一八年五月一五日・一六日に、萩山高天原で第二回の集いの開催準備を進めている。都合六名の研究者から、最新の研究データの提供を受け、夜の交流会と翌日にはお田植え神事や神楽舞いなどのイベントを用意している。

二〇一八年度の活動の方向性の第二は、四国地方での活動の具体化である。現在全国邪馬台国連絡協議会中四国支部は、中国地方の活動に限定されている。今後四国地方での活動の進展を展望することが重要となる。四国地域にもいくつかの「邪馬台国説」がある。古代史の研究者や団体があるはずである。これらの団体と個人に連絡をとって、四国地方での活動の具体化に向けた取り組みを今期より開始したい。

二〇一八年度の活動の方向性の第三は、これまでの研究活動で得た研究成果を地域に還元することである。このための方法の具体化についても検討を始めた。当面は成果のアナウンスと観光振興での活用であるが、まちづくりや地域の活性化に寄与する方向が望ましいであろう。

を毎年開催することである。この集いの開催と継続は、今後の日本古代史の解明にとつて必ず必要となる作業である。記紀と連動する地域に眠っている膨大なビッグデータ群の収集を行い、これと考古学や民俗学や自然科学のデータ群との照合を行えば、やがてこの国の歴史の謎を解明する糸口が必ず見つかるはずである。すでに二〇一八年五月一五日・一六日に、萩山高天原で第二回の集いの開催準備を進めている。都合六名の研究者から、最新の研究データの提供を受け、夜の交流会と翌日にはお田植え神事や神楽舞いなどのイベントを用意している。

二〇一八年度の活動の方向性の第二は、四国地方での活動の具体化である。現在全国邪馬台国連絡協議会中四国支部は、中国地方の活動に限定されている。今後四国地方での活動の進展を展望することが重要となる。四国地域にもいくつかの「邪馬台国説」がある。古代史の研究者や団体があるはずである。これらの団体と個人に連絡をとって、四国地方での活動の具体化に向けた取り組みを今期より開始したい。

二〇一八年度の活動の方向性の第三は、これまでの研究活動で得た研究成果を地域に還元することである。このための方法の具体化についても検討を始めた。当面は成果のアナウンスと観光振興での活用であるが、まちづくりや地域の活性化に寄与する方向が望ましいであろう。

会員研究発表会概要報告

第5回討論型会員研究発表会

平成29年12月3日(日) 三田いきいきプラザ会議室で開催。参加者は26名。

3回シリーズのテーマとして出雲国譲り・神武東征・大和朝廷成立期が、セットされ、今回は「出雲の国譲りは本当に

有ったのか？」発表者は2名。

【白崎勝氏】竜に因む名称を持つ山の位置などから出雲国譲りの存在証明を試みた。【丸地三郎氏】高地性集落遺跡の配列などから建御名方を追い詰めた事実を、そして、青銅器の埋納と書記の記述を結びつけることにより、出雲の国譲り実在の証明を試みた。

発表後、活発な質疑応答が行われ、国譲りに就いて実のある議論が行われた。

第6回討論型会員研究発表会

平成30年4月1日(日) 三田いきいきプラザ会議室で開催した。参加者は25名程。

テーマは「神武東征は本当に有ったのか？」発表者は「敬称略」植田正弘・白崎勝・丸地三郎の三氏。発表要旨は以下の通り。

【植田】神武東征は3回あった。【白崎】破鏡が神武東征の痕跡ではないか。【丸地】神武の正妃が事代主の娘であることから、出雲国譲の直後に神武東征が行なわれたことを指摘亦、神話の語る東征のルート上に残る高地性集落や大阪の河内湾の古地図、及び遺跡・痕跡を東征の証拠として、「東征が有った」ことを語った。

各氏、30分の発表後、会場からの質問を受け付け活発な議論となった。終了後、発表者と聴衆有志で懇親会を開催した。

第7回会員研究発表会

平成30年2月3日(土) 豊島区生活産業プラザ会議室で開催した。参加者は25名程。発表者は「敬称略」蓮沼啓介・木本博・神尾忠和・大下巖・石井好の6氏。演題は以下の通り。

【福島】倭人はどんな人か【木本】「倭」の発音と地名

尾】卑弥呼とは善射者【大下】女王卑弥呼を訪ねて【石井】天照大御神は卑弥呼である【蓮沼】饒速日の正体

発表会の後、懇親会を開催。懇親会席上で、アンケートを開票して、最も好評だった人を選出。石井好に決定。同氏は次回の講演会に登壇いただくことになった。

第4回講演会

平成30年3月25日(日) 豊島区生活産業プラザ会議室で開催した。参加者は60名程。考古学の西川修一先生を招いて、「列島東部における弥生・古墳時代の広域ネットワーク」の演題で中央からの視点ではなく、北陸から関東へ直接交易など地方の視点からの交流・交易について話された。第6回会員研究発表会で好評だった酒井正士氏から『邪馬台国への路を推理するー魏の使者は洞海湾に上陸し別府を目指したー』を発表された。

顧問投稿 (アイウエオ順)

私の恩師④ 福永 光司さん

柔道・従軍・道教學開拓

元沖縄大学教授 香岐 一郎

大分県中津市は福澤論吉の出身地で有名だが古代に関わる学究お二人を生んだ。標記の福永光司さん(1918〜2001)と1歳お若い重松明久さん(1919〜1989)だ。

私は幸運にも福永さんには北京・博多・下関・小倉でお会いしている。1990年代、ご母堂の介護のために故郷の中津に帰られており、私は東海大に講師の職を得て宗像に住んでいたためだった。新聞や私の属していた団体が講演をお願いしていた。楽屋で私語を交わすことができたのは至福というほかない。拙著の『新説 日中古代交流を探る』に学

記したことがあった。3章「だがが前方後円墳を築いたか」で、江南道教の思想と技術を考え詰めたのだった。この時には重松さんの「前漢高祖の位牌の形」に触れた説も考えられている。(『古墳と古代宗教』1978年)。

1989年は吉野ヶ里遺跡がブームを巻き起こし、佐賀の「日中友好・徐福シンポジウム」の「神風」になった年だったが、福永さんや梅原猛さんらパネラーが綺羅星のごとく参加されていた。主催者内藤大典氏が録音テープを北京在住の私まで送ってくれたので15分番組枠で上下30分にまとめて放送した。短波でブラジルまで届き、中波は日本に北京市内はFMで送信されていた。この時に初めて福永さんの肉声に接したが、梅原さんが福永さんの業績を褒めたことに福永さんが強い反応を示されたのが印象に残った。

佐賀シンポの研究者一行は初秋、江南から北京に来られ、宮廷料理がふるまわれ、私は福永さんに挨拶した。恰幅のいい方だった。その後、下関でお会いする機会があった。

「中津からどの高等学校へ行かれましたか？」

「ブセン、わかりますか？」

「え!?」私は一瞬、口を噤んだ。閃いた。

「わかりました!」

「うん、武専だよ、柔道をやってた」

京都にあった武道専門学校から京大文学部というコースだったのだ。作家井上靖さんは柔道に明け暮れた高校生活で医大を受けて落ちている。この福永さんの話から佐賀シンポで梅原さんが褒めた時の異常ともいえる反応が理解できた。いわゆる旧帝大では梅原さんら本流が旧制高校出身で傍系は差別されていたのだ。東大などは大戦後まで門戸を閉ざしていた。京大は戦前、文学部は傍系にも開放していた。だから戦後の旧制度数年の間に心理学者・河合隼雄・作家金石純らの異才を生んでいる。

スポーツマンが方向を変えて全力疾走する、その至高の到

達点が福永さんの道教学だ。日本国、差別と貧困が21の今も惜しまれる物心両面の問題提起しているので特記する。

膨大な学績

福永さんは2005年発刊の平凡社大辞典の「道教」を詳しく解説した。約2万字近い長文だ。中国道教の歴史、漢訳仏教との関係、日本道教の歴史、陰陽道と道教、道教文献の検討などだ。

その半世紀をこえる研究蓄積を略記する。

① 中国史籍の翻訳・紹介

『莊子』6冊・1978年、『老子』1997年

共に 朝日文庫 『列子』1991年 東洋文庫

『空海 三教指帰』中公新書 2003年

② 研究書

『道教思想史研究』岩波書店 1987年

『魏晋思想史研究』 遺著2005年

*

『道教と日本文化』人文書院 1982年

『道教と古代日本』 1997年

『馬』の文化と「船」の文化 古代日本と中国文化』人文書院 1996年

③ ほか共著・対談など

『混沌からの出発 道教に学ぶ人間学』 五木寛之 共著 致知出版社1997年

福永さんは京大と東大で数年講義したことで有名で東大での「老荘・道教」は名講義として記憶されている。また、出身地の大分県中津市では蔵書約1万冊の保存を始めた。日本語6600点、中国語3000点、漢籍1000点などだ。

前記の『道教と日本文化』と『道教と古代日本』は親しみやすい書物で万人に勧めたい本だ。私は北京生活の限られた

携行書に入れたことを覚えている。私見では日本の古神、藤原氏による「管理道教」という説の批判を伺いたかったが果たせなかつた悔いが遺る。なお、日本には道教のお寺・道観はないが、私は北京の宿舍の近くに白雲観があつたので何回か訪れている。中国道教協会本部もあつた。春節の厳寒に庶民が押し合い圧し合い境内に熱気が漲つていた。

福永さんに講演会の幕間で聴いた話だが、文字通り万巻の仏教書の漢訳『大藏経』を読まれたとのことだった。たしか単身赴任の時期だったが、持ち前の忍耐力か、今、20年前の温顔を思い出す。

福永道教論不滅！

養老令の天子神璽

NPO法人志賀島歴史研究会顧問 大谷 光男

日本の律令は近江令(天智天皇)、飛鳥浄御原律令(天武天皇)から、奈良時代の大宝律令を経て、現存する養老律令に至る。その神祇令の踐祚の日の条に、

凡そ踐祚の日には中臣が天神の寿詞を奏せよ。忌部、神璽の鏡剣を上れ。

とある。鈴木茂男氏は「日本古印をめぐる二、三の問題」(『書の日本史』第九巻)で、「天子神璽は神祇令の踐祚条に、神璽の鏡剣とあるように、実体は鏡と剣であつて印ではない。印でない神璽を冒頭に置いたのは、唐令に倣つてのことである」と記している。ところが『令集解』神祇令の踐祚の日の条の註には、「釈に云う、神璽は鏡剣なり、唐令に云う所、璽は白玉を以て、これを印となす」とあつて、日本の神璽は鏡剣であるが、唐の神璽は白玉であるという。すでに指摘されているように、「釈に云う」唐令は、則天武后より以前、あるいは神龍元年(七〇五)から開元六年(七一八)の間とみうけられる。

令にかかわる神璽の出典は『隋書』礼儀志に溯り、「神璽

は宝にして用いず」とあり、唐は神璽から神宝と改めている。日本のばあいは『令集解』公式令に、

天子神璽、謂う、踐祚の日の寿詞、宝として用いず。内印は方三寸。…(中略)…外印は方二寸半。…(中略)…諸司の印は方二寸二分。…(中略)…諸国の印は方二寸。(下略)

とあり、天子神璽には寸法を記していない。内印とは天皇の印、当初は「天皇の(之)印」で、「天皇御璽」ではなかつたと推測される。外印は「太政官印」、諸司印は中央官庁で使用する印、諸国印は諸国の国司に授けた印である。

注意すべきことは、日本では古来より太政大臣と雖も、個人に印綬が授けられたことがないことである。天皇は別格である。中国は晋朝に至るまで蛮夷諸国の王、その臣下に至るまで印綬を授けていたものと、出土印から推測できる。

『日本書紀』推古天皇前年(五九三)をみると、天皇即位に際して「因りて天皇璽印を奉る」とあり、同様に舒明天皇元年(六一九)正月には「天皇之璽印を以て、田村皇子(舒明天皇)に献る」とある。璽を曲玉でなく、皇帝・天皇が用いる印と解したばあは、「璽印」という熟語は成立せず、書記編纂時に誤つた挿入といえまいか。孝徳天皇即位前紀六月に、天皇「授璽綬」という記事も創作である。書記における印章は、持統天皇六年(六九二)九月の条に「神祇官に奏して…木印一箇を上る」とみえる。「木印」(註「明代の『輟耕録』印章制度の項に「北齊五五〇一五七七年滅亡」木印有り。長さ一尺、広さ二寸五分」とある諸橋「大漢和辞典巻六」参照。)のみである。崇神天皇一〇年九月の条に「印綬を授けて將軍となす」とある「印綬」は、右の「璽綬」と同様で、印・璽と綬(くみひも)であり、正しい表現であるが、当時はまだ官制の印章の制度も存在しなかつたので、同年七月の「猶正朔を受けず」という記事と共に、中国の史書によつたものといえる。

平安時代の延喜式は康保四年(九六七)に施行されたが、その内匠寮(中務省の被官)には、内印・外印・諸司印・諸

国印の鑄造に至る工程が計上されているが、この小稿では内印と外印の工程の二種に止めておく。

内印一面料、熟銅大一斤八両、白錫(金偏に葛) 大三両、膈大三両、調布二尺、炭三斗、和炭二斗、長功七人(取膈様工二人、鑄二人、磨三人)、中功八人小半、短功九人大半。外印一面料、熟銅大一斤、白錫(金偏に葛) 大二両、膈大二両、調布二尺、炭二斗、和炭二斗、長功七人(膈工二人、鑄二人、磨三人)、中功八人小半、短功九人大半。

斯様に「天皇御璽」と「太政官印」の鑄造仕様が記されているが、具体的には璽・印ともに銅の鑄造で、工程は鑄造の専門家でないと理解できない。夏季、春秋季、冬季と作品仕上げの人数を異にし、不定時法が採用されていたことがわかる。式には郡印の記載がない。諸国印は『続日本紀』文武天皇慶雲元年(七〇四)四月の条に、「鍛冶司(宮内省の被官)に諸国印を鑄らしむ」とある。内印の初見は『続日本紀』元明天皇和銅五年(七二二)二月であるが、外印は和銅四年一二月の条に「大初位上丹波史千足ら八人、外印を偽造し、仮に人に位を与う」とあれば、外印の鑄造はさらに遡ることになる。

神璽などにかかわる刑罰は賊盜律に、「神璽を盗めば絞、関契(割符)、内印、駅(馬)の鈴(馬馬使用許可証)は遠流」とあり、神璽、内印を盗むことは八虐の一つである大不敬に当り、神璽を盗む刑は絞首であった。また詐偽律(律逸文)には「神璽を偽造すれば斬り、内印を造れば絞」とある(『法曹至要抄』)。唐の詐偽律は「公式令によると、神宝は宝にして用いず……受命宝……皇帝行宝……皇帝之宝……皇帝信宝……天子行宝……天子之宝……天子信宝……八宝の中、人の偽造する者あらば即斬、その太皇太后、皇太后、皇太子宝、偽造する者は殺」とみえる。日本は神璽と内印の刑を別にしていて、唐律は神宝と皇帝の宝類を同一に解している。唐の神宝は白玉であり、日本と異なるからであろう。

儀制令によれば「天子は祭祀に称する所」とある。神璽も祭祀にかかわる神聖な姿とみるべきであろう。要約すれば、天子は祭祀の主宰者であって、神璽はその祭器とみられる。

日本では従来、「天子神璽」に対して多くの臆説があった。研究史的にみると、北畠親房(一三三四年没)は『神皇正統記』後鳥羽院の条で、「神璽は八坂瓊ノ曲玉ト申ス」と説き、本居宣長(一八〇一年没)は『古事記伝』で「後の世に神璽と申すは、此玉の神事なり」と玉を指し、近くは津田左右吉氏は『古語拾遺の研究』で、「神璽は何等かの文字を刻した印をいったものとするが、当然であろう」と、印章説を掲げているが、唐制を模したに過ぎないものであらうと結んでいる。瀧川政次郎氏は「律令禁物考(下)」で、「我が国の神璽は鏡、玉、釵である」と解され、「宝として用いず」という句は意味がないと述べている。井上光貞氏は日本思想大系『律令』の補注で、神璽が神器一般をさしたが、印、玉をさしたか(詳らかに)と記している。

なお、補足すると、「神璽」には璽管があった。順徳天皇の『禁秘抄(上)』「宝剣神璽」の条をみると、「神璽は神代より今に替らず、寿永に(安徳天皇と共に入水)海底より求め出し、(管)を裏むに青色の絹をもてし、紫の糸(紐)を以てこれを結ぶ」とあり、『花園天皇宸記』応長二年(一一三二)二月一九日条の裏書に璽管を画き、管中のもは印(閑白説)か、玉(八坂瓊勾玉、「慈鎮和尚記」)か、明らかでなく、二説あるという。

さて、明治二二年二月一日に公布された『皇室典範』第二章、踐祚即位第二〇条には、「天皇崩ズルトキハ皇嗣踐祚シ祖宗ノ神器ヲ承ク」とあるが、神璽についての記述はない。戦後、昭和二年五月三日に施行された『皇室経済法』第七条「皇位に伴う由緒ある物」に「皇位とともに、皇嗣がこれを受ける」とある。極めて抽象的表現である。

ところが、平成一一年一月に、国立公文書館で開催

た『天皇陛下御在位一〇年記念公文書特別展示会―展示資料のご紹介―』という冊子に、

「劍璽等承継の儀」は、皇位を継承された新天皇陛下が、即位のあかしとして、位とともに伝わるべき由緒ある物(皇室経済法第七条)である劍(草薙劍)及び璽(八坂瓊曲玉)を承継されるとともに、併せて、国事行為の際に使用される御璽及び国璽を承継される儀式です。

と紹介されて、ここに「神璽」は八坂瓊曲玉ということ、議論は終止符を打った。

なお、内印・外印はともに銅の鑄造で明治をむかえたということは、日本では官制の印に芸術性が乏しく、中国からの古印譜の輸入は江戸時代まで下るので無理もない。また金の印台に文字を刻むことが容易でなかったことにもよろう。福岡市東区に組み入れた金印出土地の志賀島周辺の考古学的研究は大きく進捗し、やがて、邪馬台国の考古学的研究には、天皇の御陵も対象になるわけで、研究が期待されている。追って、金印とともに研究されるべき阿曇氏分派の系図も遠からず拝見できるものと待ち兼ねている次第である。(了)

邪馬壹国・邪馬臺国の読み方 (公) 大正芳記財団 大平 裕

筆者は、現在日本の古代史は、どの年表を見ても、『魏志倭人伝』のとりあげた卑弥呼一人が浮き彫りになっているだけで、本来あるべきわが国古代社会の本当の姿が見えてこないことを大変残念に思っています。

その理由は、卑弥呼の正体が不明であることにつきまます。卑という賤しい字を正せば、卑弥呼という呼称は、『日本書紀』の伝える「日神・大日靈貴」という言い方も考えられ、本来の姿として浮かび上がってきます。すると一九〇二五〇年の時代は一気に『日本書紀』『古事記』が伝える、天照大神の時代に近づいてくるのです。

もう一つは、邪馬台国の呼称に問題があります。この点に関して、筆者は次のような見解に達しました。

①問題の発端は『後漢書』です。そこには、「其大倭王居邪馬臺」と記録されていますが、この「臺」については、既に七世紀、さらには一九世紀の注釈者により音の訛りと指摘を受けて、発音は「タイ」ではなく「ト」とすべきと注がほとんどかされています。

②その注釈者の一人、李賢(六五四〜六八四年)、唐の高宗と則天武后の第二子、諱名は章懐太子は、『後漢書』の注釈に当り、次の如く『後漢書』本史に注記しています。「案ずるに、今は邪馬堆(やまと)となす。音の訛(なまり)なり」と。

③後年、清朝の学者王先謙は、『後漢書集解上下』を著し、その注によれば、「案今名邪摩推音之訛反(集解) 惠棟曰魏志臺作堆又注邪摩推案北史堆当作堆今名を案ずるに邪摩推は音の訛なり。集解の惠棟は、魏志では臺は堆であり、邪摩推の推は北史に基づき堆であると注釈している」と、李賢の注釈を支持しています。

④肝心の『魏志倭人伝』ですが、ここには、「南至邪馬壹国」とあり、これは、『後漢書』の「臺」の明らかな転写ミスと考えられます。日本の学者の一部は、『後漢書』の撰上が五世紀前半で、『魏志倭人伝』の三世紀後半と比べて遅れていることから、『魏志倭人伝』の方が正しいのではと判断しているかもしれません。ただし、これは間違いで、『後漢書』の帝紀は、皇帝の在位中にすでに書き始められていて後漢末期に王朝が乱れ、そのまともが遅れたからと、いつて、『魏志倭人伝』の方が正しいとは言えないのです。

⑤次は、『隋書倭国伝』です。隋の使者裴世清は、六〇八年筑紫より瀬戸内海諸国(一〇方国)を巡りながら難波に到着。各地で歓待を受けながら飛鳥に入朝しました。そして次のような報告をしています。「倭国の境域は、東西徒歩五カ

月、南北は徒歩三カ月で、おのおの海に至る。東が高く、低い地勢で、邪摩堆を王都とする。ここが、すなわち『魏志』(『三国志』倭人伝)にいう「邪馬臺」である。」と。これらの文献を簡単にまとめてみますと、

・『後漢書』……………邪馬臺

李賢注 〓今は邪馬堆となす。音の訛なり。

王先謙 〓案今名邪摩推音之訛反。

・『三国志』 魏志倭人伝……………邪馬壹国。

・『隋書』……………邪摩堆。『魏志』にいう「邪馬臺」である。

これらに加え、日本側にヤマイ、ヤマタイといった地名・地域がないにもかかわらず、

①吉川忠夫訓注『後漢書』(岩波書店)の読みくだしは、「其の大倭王は邪馬台国に居る。」

②井上秀雄他訳注『東アジア民族史1 正史東夷伝』(東洋文庫264 平凡社)の

・『後漢書倭伝』では、「大倭王は邪馬臺国(やまと)に」

・『三国志魏書倭人伝』では、原文に忠実に「南にすすみ邪馬壹(やまいつ)国。」

・『梁書倭伝』では、「邪(邪か)馬臺国にいたる。」

と、吉川忠夫は「ヤマタイ国」、井上秀雄他はなんと「ヤマト国」、「ヤマイツ国」と、同じ本の中で二つの読み方を提示しています。一方、藤堂明保、竹田晃、影山輝國著『倭国伝』(講談社学術文庫、講談社)は、文中すべて「ヤマト」に統一されています。

井上秀雄、吉川忠夫らのこのような誤った解釈は、日本の古代史をミスリードしていると思わざるを得ません。

いずれにせよ、先学の考証や、六〇八年、推古朝の大和を訪れた隋使の現地報告「邪摩堆。『魏志』にいう「邪馬臺」である。」を無視し、加えて彼らは、唐朝第一の古典研究家章懐太子の注釈を無視しています。すでに日本は、六三〇年に第一次遣唐使を派遣、これに次いで唐も六三二年に高表

仁を来朝させています。唐にとっては、倭国の王都の名の呼び方を知らないといった時代ではなくなっていたのです。このような解釈の結果、後世の古代史研究を混乱させてしまったのです。またその結果、「邪馬台国」北九州説などが生まれてしまったのです。

最後に、邪馬臺も倭も大和といった漢字も知らなかった当時の人々は、漢字が一気に輸入され始めたころ、どのような漢字を当てはめていたのでしょうか。まず、『日本書紀』雄略天皇紀四年の条では「天皇乃口号曰、野磨等能、……」、さらに、欽明天皇元年二月の条では、「置倭国添上郡山村。」、七年秋七月の条は「倭国今来郡言。」とあります。一方、『古事記』は、仁徳天皇の条に「夜麻登幣遣」、雄略天皇の条に「夜麻登能」と、「夜麻登」を当てています。もう一つ、『万葉集』は、巻頭を飾る泊瀬朝倉宮御宇天皇代雄略天皇の「籠もよ み籠持ち……そらみつ やまとの国」は、「山跡乃国」、続く息長足日広額天皇(舒明天皇)の「大和には、群山あれど……」は、「山常庭村山有等……」、とあります。『古事記』『日本書紀』『万葉集』など、いずれも「やまと」とはありますが、「ヤマタイ」「ヤマイ」といった音を持った表記はありません。

一方、考古学的見地からも、唐古・鍵(大和)、吉野ケ里(肥前)、池上曾根(和泉)の三大環濠遺跡は、縄文末期から弥生時代を経て古墳時代まで続いた大遺跡群です。その中でも唐古・鍵遺跡は、吉備の特殊土器をも擁して、次の纏向遺跡へもつながるもので、わが国の大倭国からいわゆる男王、卑弥呼(天照大神)の時代につながった遺跡と考えられます。

南海産貝製腕輪の道

―「卑弥呼」が着けたブレスレット―

東京大学総合研究博物館研究事業協力者 小田 静夫
九州最南端から台湾までの約千二百五十キロメートルの洋

上に百数十の島々が分布し、南西諸島、琉球列島、琉球弧、南島などと呼称されている。これらの島々はサンゴ礁が発達し、暖かく浅い海(イノー)には、シヤコガイ、ヤコウガイ、サラサバテイ、イモガイなど、やや深い海底にはゴホウラ貝が生息している。この地域の先史時代遺跡の特徴は、イノーに面した海岸砂丘上に形成され、多数の貝類が発見され、列島の「貝塚遺跡」と酷似している。

沖繩の貝塚時代前期(縄文時代)の人々は、サンゴ礁の恵を受けて「貝器文化」が発達した。オオベッコウガサやメンガイ、カサガイは、貝殻の中心部を切り取り貝輪(腕輪)とし、また多くの貝製品を製作した。貝塚時代後期(弥生く平安並行期)になると、九州の弥生人が「南海産大型貝」を求めて奄美・沖繩諸島に南下し、「貝交易(貝の道)」活動が開始される。現在、この「貝の道」は、「琉球列島(ゴホウラ・イモガイ)から九州、瀬戸内、日本海沿岸、北海道へ」(琉球列島貝の道)、また「伊豆諸島(オオツタノハガイ)から関東、東北地方へ」(伊豆諸島貝の道)の二つの交易ルートが知られている。

(1) 黒潮を越えた九州縄文人
壊滅的な大打撃を与えた鬼界カルデラの巨大噴火(七千年前)が収束すると、南九州から二つの縄文人集団の南下があった。一つは縄文前期の熊本県曾根貝塚文化人(六千五百〜四千五百年前)、もう一つは後期の鹿児島県市来貝塚文化人(三千二百〜二千七百年前)たちであった。彼らは生活環境が激変した九州本島を離れ、トカラ海峡を横切る世界最強級の「黒潮本流」(流速4ノット)を、手漕ぎの丸木舟で危険を冒して航行し、南島の先史人たちとの交流を果たしていた。

この頃の北琉球圏(奄美・沖繩諸島)は、豊かなサンゴ礁の恵を受けた「サンゴ礁文化」(イノーの魚介類)が発達していた。九州の縄文人たちは、九州本島には見られない素晴らしい「貝器文化」に魅了され、各種貝製品(貝輪、貝小皿、

貝指輪、貝刃、貝鏃など)を持ち帰った。その結果、列島内の縄文人たちにも周知され、南島文化への憧れが強くなっていった。

(2) 南海産大型貝の魅力

暖かく浅い海が発達したサンゴ礁域から採れる南海産の大型貝類は、殻も厚く加工がしやすく、その上に豊かな色彩とデザイン、光沢が表面に保持されている。こうした美しく装飾性に富み、神秘性に満ちた大型貝は列島内の海域には分布しないものであった。

縄文人は、この珍しい貝製品を入手するだけであったが、弥生人は「交易」という形態で南島との関係を進展させた。これは九州の弥生人たちが南島に出かけて本土の品物(弥生土器、金属製品、米、布など)と貝製品の材料を交換し、九州本島で加工・成型し列島各地に流通(貝の道)させた。特にゴホウラ・イモガイから製作(金隈型、師岡型など)された南海産貝製腕輪は、北部九州の弥生社会では特に珍重される装身具であった。

沖繩本島中部の西海岸や周辺島嶼には、貝塚時代後期(二千三百〜八百年前)の遺跡が集中し、南海産大型巻貝(ゴホウラ・イモガイ)が集積した状況で確認され「貝溜り・貝集積」と呼ばれている。これは九州本島との交易用の貝殻備蓄遺構で、弥生人の腕輪の材料であった。

(3) 首長の威信材になる

北部九州は大陸文化の窓口で、弥生人は大陸の白い玉や渦巻(螺旋)文様への信仰に接し、新しく定着した日本の農耕社会の重要な精神的「呪具」として、この南海の肉厚の「巻貝」であったゴホウラ・イモガイ製貝輪(腕輪)を位置づけた。そして、腕輪の好みも縄文時代の有色腕輪から、弥生時代には白色腕輪に変化していった。特に白玉のような光沢をみせるゴホウラは、九州弥生社会の首長層の憧れの腕輪として権威づけられた。

首長や司祭者のシンボルに成長した南海産のゴホウラ・イモガイ製腕輪は、男性はゴホウラを右手に、女性はイモガイを左または左右の手に装着し使用する規範が成立した。貝の素材は奄美・沖繩諸島から入手し、加工や成型は北部九州の弥生人が行った。この南海産貝製腕輪の交易活動は、主に西北九州や南九州の「海人」たちが南下して貝を入手した。やがて弥生中期になると、北部九州に小国家が形成され、首長たちは南海産貝製腕輪を支配者の「威信材」として権威づけた。

(4) 「邪馬台国」の誕生

三世紀前後の日本の様子が記述された中国の『魏志倭人伝』によると、倭国は二世紀の終わり頃大きな争乱があり、諸国が共同して邪馬台国の女王「卑弥呼」を立てたところ、ようやく争乱が収まったとある。そして、三十国余りの連合体「邪馬台国」が誕生した。現在、邪馬台国の位置については、九州説と大和説が古くから論争されている。

女王卑弥呼は、二二九九年に魏の皇帝に使いを送り「親魏倭王」の称号と銅鏡などを頂戴したという。また卑弥呼は「鬼道」に長じていた巫女とされ、この貴重な南海産貝製腕輪を南島から多数入手し、それを装着し神の意志を聞く宗教政治を行っていたとも言われている。

(5) 「卑弥呼」の墓には何が

この邪馬台国と卑弥呼の墓の所在は、永遠のロマンであるが、史書によると卑弥呼は二四七年に没し、「径百余歩」の大型古墳が築造されたという。こうした弥生時代終末から古墳時代初期の大型墳墓は、北九州や大和地方に集中して確認されている。

もしも、卑弥呼の墓が発見されれば、その棺の中には白色に光輝く「イモガイ製腕輪」を、両手に多数装着した女王の遺骸と、副葬品として納められた多数の銅鏡や南海産大型貝で製作された各種装身具(威信材)が確認されるに違いない。

(6) 「貝の道」の終焉

やがて古墳時代に入ると、畿内の大王墓(前方後円墳)らは、南海産貝製腕輪の模倣である腕輪形石製品(鍬形石、車輪石、石釧)や青銅製品(有鉤銅釧)が多数出土する。この事実から、腕輪のデザインは貝製品を忠実に模した形状を示していたのである。これは列島の古代人たちの間で、いかに南海産の大型貝の魅力が心に深く根づいていたかの証左でもあった。

つまり、弥生時代後期から古墳時代初期にかけて、腕輪の素材が南海産の貝殻から、大陸から移入された青銅や日本産の緑色凝灰岩などの貴石に換えられたことで、大和朝廷の「威信材」(宝器)に対する価値観が変革したことがうかがえる。こうして、数千年以上続いた「貝の道」は衰退するが、そのルートはその後、九州と南島への主要な海上交通路(ヤコウガイ・カムイヤキ交易、遣隋使・遣唐使など)として利用され続けたのであった。

大石から現れた童子

元九州考古学会会長 島津 義昭

熊本市東区健軍本町(旧・託麻郡)にある健軍神社は、散策コースの中継地である。また故郷の阿蘇市一の宮にある肥後一の宮の阿蘇社と関係深い「阿蘇社三社(甲佐神社・郡浦神社)」の一であり、熊本市民の崇敬する由緒ある社である。史料上の初出は、天永四(一一三三)年の、大宰府解で健軍社の宮寺が燃亡したので、国司に修造を云々(長秋記)とある。社傳では、欽明天皇十九(五五八)年に勧請したと伝えられている。祭神は健軍大神(健緒組命)・阿蘇大神(健磐龍命)・阿蘇津媛命・神渟名川耳命・国造速瓶玉命・草部吉見神・比咩御子神・彦御子神・若比咩神・新彦神・彌比咩神の他に末社六社がある。

熊本の代表的な地誌での記載を紹介する。北嶋雪山『國郡一統志』は寛文九年(一六六九)年の成立と推定さる、最古

の地誌であるが「國郡名社志(託麻郡・健軍社)」で次のように記す(線筆書)。

託麻郡健軍社者阿蘇大明神也昔在國司毎月詣之祭祀七十余本宮去此甚遠某年冬祭將詣路徑此処遇雪即止此世忽生杉木大(株)怪見之有新生児二人感敬之余
境建別宮名健軍社

この話は、熊本の地誌の集大成とも言える『肥後國誌』でも紹介されているが『國郡一統志』にはみえない伝説が加わっている。

記事の前に『肥後國誌』の来歴を紹介しよう。享保十三(一七二八)年の成瀬久敬が草稿『新編肥後國誌草稿』作成し、森本一瑞がそれを増補し、さらに明治十七(一八八四)年頃、水島貫之が未紹介地区を加え増補した。さらに後藤是山は大正五(一九一六)年に新資料を追加して出版した。歴史ある地誌で昭和五十九(一九八四)年には松本寿三郎が補遺索引を加え、地元の青潮社から出版された。熊本の地域史研究の最初の一冊である。柳田國男も民俗学の素材として利用した(『日本の伝説』)。「肥後國誌」での健軍社の記事を読みよう。

健軍十二社大明神宮

欽明天皇十九年時ノ國司阿蘇大明神ヲ勸スト云阿蘇甲佐郡浦健軍四箇ノ神社ト号伝ニ云当社ハ阿蘇大明神降臨ノ地也
欽明天皇十九年当國 國司今云古府中阿蘇大神ヲ尊敬シ毎月參詣ス今ノ且過瀬ニ大橋アリテ健軍ノ杉馬場ニ通リ阿蘇ヘノ街道也ト云或冬參詣ノ時嚴寒肌骨ニヘンシ大雪降テ前後ヲ間テ進退此ニ谷ツテ暫ク此邊ノ椎ノ下ニ憩テ雪ノ晴ヲ待ツ國司心底ニ此所ニ阿蘇大明神ヲ勸請老弱ノ者ノ阿蘇參詣ノ勞ヲ救マホシク思惟スル所ニ一株ノ杉ノ下ニ三歳可童子忽然ト現シ國司ニ向ヒ汝阿蘇大神ヲ尊信シメニ心ナク嚴寒積雪ヲ厭ハス来リ剩ヘ衆人遠途ノ勞ヲ憐ミ大神ヲ此ニ勸請セント欲フ神明何ノ感應セサランヤ宜ク此所ニ勸請スヘシ而

ルニ皇城鎮護ノ為ニ阿蘇宮ハ東ニ向ヘリ因テ 夷賊新羅鎮退ノ為ニ当社ハ西ニ向テ迹ヲ垂レン健軍ト号スヘシ吾汝ニ託之 ト言オワリテ暗然トシメ失ス國司大ニ驚キ感シ朝廷ニ訴ヘ一社ヲ創建シメ 健軍宮トシ神領ヲ寄付ス其杉ハ一本杉ト云其椎ハ猶近世迄有シト云社前馬場ノ傍ニ有之大石ハ童子此上ニ出現アリシ所ト云

『國郡一統志』と『肥後國誌』は、共に①阿蘇大明神を祀る②国司が崇拜した③冬季の参拝で雪や寒気に難儀した④童子が現れた⑤一社を建てた、との記事は共通する。筆者が特に注目するのは④である。

『肥後國誌』の「馬場ノ傍ニ有之大石ハ童子此上ニ出現アリシ所ト云」との伝承は、現在でも引き継がれ「立石大神」として、楼門前の馬場に祀られている。

今丑元則宮司御教示では、

図1、13番の猿田彦大神北側の通称「丸林(まるばやし)」に在ったとのことである(図1・楼門から三十mほど北になる)。

石はそれ自身に内蔵する靈質の存在が特定の石には顕著であることから、古人は、石神(いわがみ)・磐座(いわくら)・磐境(いわさか)と呼んで崇拜したことは、神道考古学が明らかにしている(大場磐雄先生「祭祀遺跡」昭和四十五年・一九七〇)。「肥後國誌」でいう「大石大神」もそのようなものである(図2)。



図2 立石大神 (下端幅1m、厚み1m、高さ1.4m)



図1 健軍社配置図 (15立石大神)

のモチーフは、仏教における童子信仰をも思わせる。

阿蘇修験道の固有の信仰とみられる「乙護童子(おとごうじ)」は、不動明王の眷属である矜羯羅童子(こんがらどうじ)や制多迦童子(せたかどうじ)と似ており、護法として



図3 童子出現

阿蘇修験道で崇拜された(佐藤征子 護法童子―近世肥後における信仰の展開―仏教民俗学体系1992)。

健軍社宮司宅には、近世の作であるが大石から童子が出現した場面を描いた屏風がある(図3)。また国司の阿蘇参詣は、

近世の「阿蘇山参り(御池参り)」を反映している。今日でも「阿蘇参り(阿蘇神社では「神札受け」という)は行われている。阿蘇大明神を崇拜する庶民が願いを込めて旅をし、祈祷札を受けていた事実は、近年の調査や研究で明らかになってきた(佐藤征子 阿蘇山信仰 二〇一三 池浦秀隆 阿蘇山火口をめぐる近世期の宗教構造 二〇一三年)。その折り、健軍社が途中のランドマークになったこととは言うまでもない(図4)。



図4 健軍社から見た阿蘇山(明治期のスケッチ)

邪馬台国の会のおかげでありがたの巻

歴史作家 関裕二

今回は、邪馬台国の会のおかげで生まれた拙著の話を少々。私ことになるが、つい最近、ヤマト建国をめぐる私見を上梓した『神武天皇VS卑弥呼』新潮新書。これは、偶々、

重なって完成したもので、きっかけは、二〇一七年五月十四日(日)に文化シャッターBOXビル多目的ホールで行なわれた全国邪馬台国連絡協議会第五回東京大会「日本人の起源を探る」に参加したことだ。しかも、たまたま出席することになったのだ。その経緯を、話しておきたい。

邪馬台国の会の前日の土曜日、小生は岡山で、講演を行っていた。テーマは、「ヤマト政権の中心に立ちつづけた吉備と物部氏」だ。お招きくださったのは石上布都魂神社(岡山県赤磐市)を中心とする郷土史家の面々で、講演を終えて岡山市に宿泊した。一泊の講演で、翌日が日曜なら、ほぼ間違いなく、地元の方々が史跡を案内して下さる。こちらがお断りすれば、がっかりされることが多いから、一日スケジュールを空けておく。そこまでが、講演のお仕事と思っているからだ。

講演のあと、懇親会が開かれた。これも、いつものこと。ところが、翌日の話がまったく出てこない。狐につままれたような気持ちでホテルに戻り、「さて、翌日はどうしたものか」と思索した。せっかく古代史の宝庫岡山に来て、史跡をめぐらぬ手はないと思う。しかし岡山のめばしい遺跡はすでに巡っていたし、これまで行ったことがない場所となると、クルマがないと不便だ。

翌朝、ふと思いついたのは、参加をあきらめていた邪馬台国の会だ。

「朝早く新幹線に乗れば、邪馬台国の会、間に合うかもしれない」と、咄嗟に思いつき、新幹線に飛び乗った。まさか、この邪馬台国の会の講演を聴いて、新たな着想が生まれるなどとは、想像もしていなかった。

インスピレーションを受けたのは、小田静夫氏の講演で、タイトルは「海を越えて日本列島にやってきた先史時代人の故郷を探る」だった。

小田氏がまず注目したのが、上野原遺跡(鹿児島県霧島市国分上野原縄文の森)で、縄文草創期から早期にかけての、最大級の遺跡だ。ここに、最先端の縄文文化が花開いた。もっとも早い段階で定住が始まっていたことも分かった。「縄文時代は東から花開いた」というかつての常識を覆したのである。ではなぜ、鹿児島県に、縄文時代の最先端地域が生まれたのだろう。小田氏は、南方から黒潮に乗って海人がやってきたからだと推理した。

話は数万年前までさかのぼる。アフリカを飛び出した人類の一部は、東南アジア周辺にたどり着いた。けれども温暖化の影響で海面が上昇し、住んでいた土地(スンダランド)が水没してしまった。そこで舟に乗って逃れ、黒潮に乗って日本にたどり着いたという。彼らこそ、南部九州に海人の文化を携えてやってきた人びとだというのが、

ただし、およそ六四〇〇年前の鬼界カルデラの大噴火によって、南部九州の縄文社会は壊滅的打撃を受けた。南方に逃れる者が多かったが日本列島各地に散った人びとは、北方からやってきた人びとと混じわり、文化を共有するようになった。こうして、闊達に大海原に漕ぎ出す縄文人が誕生したというわけである。

『魏志倭人伝』に描かれた九州の海人たちは、目のまわりにイレズミをしていたが、これは縄文時代から継承された習俗だった。また、九州の西北の海人たちが縄文的な遺伝子を継承していたことも分かっている。日本列島を跋扈していた古代の倭の海人たちは、縄文の流れをくみ、彼らはスンダランドからやってきた人びとの文化と習俗を継承していたのだろう。

この、倭の海人と縄文のつながりがはつきりとして、新たな仮説が生まれたのだ。

筆者は、「神武天皇の母と祖母は海神の娘」という『日本書紀』神話の記述や、ヤマトの初代王 神武天皇は、な

せ纏向ではなく極原に宮を置いたことになっているのか、不思議でならなかった。もうひとつ謎めくのは、極原宮の周辺を大伴氏や久米氏、忌部氏が固めていて、しかも彼らが九州の海人出身だった可能性が高いことなのだ。

海神の子・神武天皇とは、何者なのか。「実在しない」と信じられていたが、それならなぜ、海人に守られていたのか。ここから導きだされる仮説とは……。謎を解く鍵は、黒潮が連れてきた縄文の海人が握っていた……。詳細は、拙著の中で。

市民の歴史の会雑感

考古学を科学する会 主宰 藤盛 紀明

幾つかの市民の歴史の会を主宰し、今年で創立46年になる「東アジアの古代文化を考える会(以後東アジアの会)」には設立時から参加し、今では最古参事である。「東アジアの会」は一度大分裂を起こしたことがある。市民の会は企業と違って、命令や強制は出来ないで運営は非常に難しい。私が「東アジアの会」の幹事になった時は女性幹事が多く俳優の田村高廣氏の奥様も幹事でした。この幹事会は無政府主義者の集まりのようでした。幹事会で一度何か決めても、前回参加しない幹事が次回に出席して、「私は聞いていない!」と反対してご破算になることが通例でした。私は分裂騒動の後に、むりやり幹事にされてしまいました。古い幹事からは分裂騒動を起こした人はかなり横暴・独断だったと聞かされました。その方にはお会いしたことはありませんでしたが、幹事会の運営状況を知ると、何となく分裂騒動をした人の気持ちもわかるようにも思えました。市民の会は一人のリーダーの独占運営が結構多いですね。従ってそのリーダーが亡くなったり、活動が出来なくなると消滅するケースが多いようです。「東アジアの会」が46年も継続したのは集団指導体制だったこと、順次新しい幹事を入れて若返りを図っていることでしょう。新しい幹事が入ると、今までお呼びしなかつ

たような分野の先生を講演にお呼びするようになり、会員勧誘にもなります。市民の会を運営する場合には3つの判断システムがあると考えます。1)誰かが一刀両断に決める。あるいは独断で行動してしまふ。2)皆で良く議論するが、最後は誰かが強引でも決定する。3)皆が納得するまで議論する。通常は2)で、時には1)もありと考えるが、如何でしょうか。全国邪馬台国連絡協議会は全国組織なので運営は大変と思いますが、今後の発展祈念します。

「国造本紀」検討の一試論

日本家系図学会会長 宝賀 寿男

最近、縁由があつて栃木県の那須に向向く機会があつた。これをきっかけに、那須から北方の福島県あたりの地域について、上古の開発初期段階の歴史を考えてみようとしたのが、この稿の引き金でもある。

日本列島中部の畿内地域でもないと、地方では当該地域の古い文献資料は殆どないから、『風土記』逸文とか『旧事本紀』の「国造本紀」くらいしか始源的なものは見当たらない。それぞれ、きわめて断片的な記事しかなく、しかも「国造本紀」は編者・成立事情など、得体のよく知れない史料である。

これを巻第十におさめる『先代旧事本紀』は、江戸時代から偽書論議が多くなされてきており、すくなくとも聖徳太子の撰という序文は明らかに後世の偽作である。ただ、そのなかでも、物部氏や尾張氏の系譜を記載する「天孫本紀」やここで取り上げる「国造本紀」には、他の文献に見えない独自の所伝の記載があり、偽書論議をさしおいても、史料として有効ではないかという立場が常にあった。ここで、『旧事本紀』全体の真偽を論ずるつもりはないが、巻第一の神代本紀から巻第九の天皇本紀までの殆どの巻が編年史で記述されるのに対し、巻第十だけが別に序文的な記事があり、内容的に

も上記の九巻とは独立した形のものとなっている点に留意される。だから、『旧事本紀』のなかに入れられず、別書であってもならん不思議ではない。

具体的に見て、尾張氏の系譜を見ると、尾張での初代ともいふべき重要な位置を占める平止与命について、系譜歴代を記載する「天孫本紀」ではその尾張国造任命についてはなんら触れず、天火明命の「十一世孫」の世代に置くのに対し、「国造本紀」で「天火明命の十世孫」で尾張国造の初任とするように、記事内容にも差違がある。もつとも、前者の「十一世孫」は天火明命の子を「二世孫」と数える方法であるのなら、実質的に世代の差違はないとも言えようが、同じ書の名で表記の意味を異とするのは、どこに意義があるのだろうか。

さて、「国造本紀」は、畿内の大倭国造から始まり南九州の多櫛嶋までの地域について、全国で合計百三十余りの国造の名を掲げ、各々について任命設置時と初代国造の系譜とを簡単に記している。ただ、「国造」(大化前代の氏姓国造)とは言いながら、記事には和泉・摂津・出羽・丹後・美作といった律令時代の国司名(国名)を記載したところもあるし、伊吉・津嶋・多櫛のように島名(嶋造、泉直)をあげたりもする。また、山城と山背(ともに、訓は「やましろ」)、无邪志と胸刺(同、「むさし」)、加我と同宜(同、「かが」)は重複掲上とみられて、記事に問題があるものもある。それ以外にも、他の史料に国造名があげられる幾つかが欠落することや、記事内容に疑問がありそうな箇所もある。

それでも、総じて言えば、他に類例のない国造関係史料であり、「かなり信用できる古伝によっていると思われ、古代史研究の貴重な史料となる」(黛弘道氏)という評価がある。

いし分割の時期がマチマチなことがあるから、国造の総数を一律にとらえきれないが、延べ総数が具体的にいくつあったかの問題については、一二六(新野直吉氏の『研究史国造』)、一二七(吉田晶氏の『日本古代国家成立論』)などのほか、概ね一三〇前後とみられてきた。しかし、これに限らず、国造にかかる設置時期や系譜など個別の具体的な問題については、研究の蓄積がかなり乏しいと思われる。その基礎には、古代の地方豪族についての系譜が乏しく、その研究が太田亮博士を含め我が国学界において不十分だという事情がある。

さて、当初の検討テーマに戻ると、古代諸国造の具体研究の一つとして、「国造本紀」に掲載の陸奥の国造を考えてみる。同書には、古代陸奥地方の国造として十一があげられるが、このうち福島県東北部の浮田国造だけは、系譜が毛野系の出であって、この系譜には疑いがないので、ここでの検討対象から除き、また、常陸北部の高(多珂)国造と下野北部の那須国造は、ともに勿来関・白河関という陸奥・関東との境にある重要関所を境界ないし領域にもつ事情に鑑みて、陸奥諸国造と一体的に考えてみることにする。

これら十二国造の系譜については、同書の記事に拠るかぎり、陸奥では大きく二流に別れる。一つは阿岐国造同祖で天湯津彦の後裔とするもので、これが合計六国造あり(③阿尺④思口〔思太か〕、⑤伊久、⑥染羽、⑦信夫、⑧白河)、もう一つが建許呂命の後裔とするのが合計四国造(①道奥菊多、②道口岐閉、⑨石背、⑩石城)であり、この集団は石城国造が本宗だと示唆する記事となっており、天津彦根命の流れで茨城国造と同族とみられている。一方、関東の⑪那須国造は阿倍氏系とされ、⑫高国造については、同書の房総の阿波国造等の記事から、天穗日命の後で武蔵国造の同族とされる。

その一方、『風土記』や各種系譜などの文献や、考古学遺物・遺跡の状況、祭祀関係や地理配置などから考えると、史実原型としては、「国造本紀」の記事から導かれるもの、直

分、様相が異なるのではないかという可能性がある。

この見方をもっと端的に言うと、上記十二国造と言うものの、その実態が七、八ほどの国造数であって、それらの系譜も祖系が一つで、皆が同族ではなかったかと疑われる。要は、皆が天湯津彦の後裔であって、陸奥関係で出てくる

「建許呂命」とは、茨城国造の祖・建許呂命ではなく、年代が少し古い別人であって、石城国造や高国造の祖として見える建黒坂命、「建許呂阪命」を指すのではないかとということである。国造の数のほうで言うと、①道奥菊多、②道口岐閉、⑩石城と⑫高とは、大化前代の実態が一つではないか、また、考古遺跡や地理近接・居住氏族などの観点から考えると、⑪那須国造と⑧白河国造とは一体ではなかったか、⑨石背国造と③阿尺国造も少なくとも当初は一つの国造ではなかったか(後に分岐した可能性もあるが)、という疑いもある。

3

古代の人名・神名は、その伝える後裔氏族によって異なることが多くあり、とくに天照大神(実態が男性神の天活玉命)の子で、葦原中国(記紀神話のいわゆる「出雲」の地)に天降りして大己貴神の女婿となった天稚彦、こと天津彦根命や、その子の天目一箇神・少彦名神の兄弟についてはすこぶる別名が多い。だから、実体が捉えにくいのだが、陸奥諸国造の遠祖とされる「天湯津彦命」が何者かという把握が的確になされてこなかったために混乱が生じたと考えられる。

一般には、阿岐国造の項の記事にもあるように、その同祖であって玉作部の祖神とみられてきた。それは、明治の国学者・系図研究者の鈴木真年の著『日本事物原始』の「分国定境」の項の記事にも見るように、「阿岐国造ノ族ニシテ、崇神天皇御世小塩命武刺国ニ来リ多摩郡ニ居シ、祖神天明玉命ヲ祭ル阿岐留神社コレナリ、其孫ヲ陸奥ニ遣シ其業ヲ開カシム、依テ其国ニ玉造ト号ル地多シ」という理解にもつながる。

たしかに、玉作部や阿岐国造の一族が崇神朝に中臣氏の祖と共に武蔵西部に来て居住し、あきる野市に阿岐留神社を奉斎して現在にまで至っている。しかし、同社の祠官家阿留多伎氏の系図・所伝資料には、そこから陸奥への支族分岐が見えず、鈴木真年の記事には疑問が出てくる。

それでは、「天湯津彦命」が何者かというのが問題の基本であり、この解決につながる。この神が、白河国造条では「天降天由都彦命」という名で表記されており、天降伝承をもった神と分る。そして、当該神の十世孫の子孫たちが成務天皇朝に陸奥諸国の国造に定められたという「国造本紀」の記事から、当該神の活動時期が天照大神の次世代にあたると思われる。一般に、神代及び上古の人々の標準世代の配分は、「①天照大神―②天忍穗耳尊―③瓊瓊杵尊―④火遠理命―⑤神武天皇(中間に四世代)―⑥崇神天皇―⑦垂仁・景行天皇―⑧成務天皇」とつながるから(この詳細は、拙著『神武東征』の原像を参照)、成務天皇は天照大神の十一世孫の位置にある。だから、成務天皇朝に活動時期をもった人々を十代遡上した祖先とは、天照大神の子の世代に活動した神ということになる。この世代配分から考えても、「天降天由都彦命」とは天稚彦に当たることになる。

天稚彦は、その子の少彦名神を通じて、玉作部や鴨県主などの遠祖となるが、もう一人の子の天目一箇神を通じて、出雲国造や物部氏の遠祖神ともなっている。物部氏の始祖・饒速日命の子の一人には、神武の大和侵攻の際に諏訪神建御名方命の一族と共に東国に逃れた神狭命がおり、その子孫は武蔵・相模や房総の海上地方などに繁衍して、これらの地域の諸国造を多く出した。その子孫のなかには、常陸の多珂国造の祖の記事に見える「弥都侶岐命」もいるから、これが陸奥諸国造の系譜における実際の祖となる。そして、弥都侶岐命の孫くらい世代に「陸奥国風土記」逸文に見える「国造磐城彦」が出て、この一族から出たのが石城・那須や陸奥諸

国造というのが実態の系譜ではなかったろうか。

多珂国造が大化前代までは石城国造と一体であり、多珂国造の氏姓が「石城直」だという『常陸国風土記』多珂郡条の記事が大きな手がかりとなる。白河郡でも国造後裔とみられる同郡大領の氏姓が「奈須直」だと史料に見える事情もある。

「天湯津彦命」の名は、少彦名神後裔の鳥取部・鳥取造が祖神とする天湯川桁命の名前にも通じるが、那須国造及び石城国造の各々の領域にある式内社の「温泉神社」の本来の祖神でもあったろう。いま、両社ともに、いま「温泉神」として少彦名神・大己貴神の両神を祭るといえるが、これは原型が転訛したものか。石背国造の領域の岩瀬郡にも、温泉八幡神社があり、那須・石城・石背国造の各々の領域内には高久仁井田、塩田などの共通する地名が見られる事情もある。

要は、无邪志国造からの分岐が石城国造の始祖であったとみられ、石城国造一族が永く奉斎した大國魂神社も、武蔵には武蔵大國魂神社として鎮座するという共通点がある。だから、武蔵の玉作部の支族が陸奥にきたのではなく、无邪志国造の支族が来たとみるほうが自然である。武蔵国造一族は、さいたま市大宮に永く氷川神社を奉斎し、その祠官家西角井家に伝わる系譜では、出雲国造の分流と伝え、「姓氏録」左京神別の入間宿禰条でも同国造一族は同様の系譜を伝える。

石城や那須などの国造も含め陸奥諸国造一族の本来の姓氏として「丈部」をもち、これが陸奥第一の大族として広く各地に繁衍した。丈部は、後に阿倍氏の配下として活動したこともあって、奈良時代及び平安前期には、阿倍陸奥臣など「阿倍□□臣」という形で賜姓することがあったが、それが直ちに阿倍氏一族の出ということにはならない。「丈部」の姓氏は関東や東海道・北陸、伊賀・大和などにもあって、それが必ずしも同一系統とは限らないのであろうが、武蔵や相模にも見え、更に遠く離れて出雲にも多くあるという事情は、

これらの同族性を強く示唆する。

以上のように、ここでは古代国造の系譜についての一試論を提示したが、「国造本紀」の記事を踏まえつつも、様々な資料や現地事情などに即して総合的に考えていくことの重要性を痛感する。ここでは、国造の設置時期をいたずらに繰り下げるといふ史料とはかけ離れた手法や見方は、厳に慎むべきことと思われる。

邪馬台国の時代の「考古年代」と「科学年代」

― 邪馬台国史・段階区分論序説的エッセイ ―

関西大学大学院非常勤講師 森岡 秀人

ささやかな提言

私は、伝統を背負う考古学的な方法に基づく年代を「考古年代」と呼び、各種分析や測定・計量に基づく自然科学の方法を用いる年代を「科学年代」と呼び慣わしている。かつては前者を「相対年代」、後者を「絶対年代」として区分し、考古学界ではその用語法により少なからず誤解を招いていたことも多かったからにはほかならない。具体的に言えば、「実年代」を持つ後者と時期表現に拠る順位程度しかわからない前者といった意味合いに解釈されることがまま多かった。前者は主観的で曖昧であり、後者は具体的に非常に正確であるといった理解が一般には存在する。考古学者の限界と自然科学者のピンポイント的に突き出された年代が精度の面やその方法のレベルで対比されたわけである。方法論の異なる問題を良し悪しにすり替えては、一般の誤解もより一層助長するのである。「相対」「絶対」という用語は、それ自体に人それぞれの印象、思惑、想像が付き纏うのである。

したがって、私は昨今、年代概念を冒頭に記したように、「考古年代」「科学年代」の対比に改めたわけである。そして後者について、私は近年、「科学年代群」という呼称も与えている。科学による真理は一つと信じられたりもする複数の

自然科学的年代測定方法を考古学者が併用的に活用する場合も比較のみられ、またそれが自然であるからである。年輪年代測定法・AMS炭素年代測定法・樹木セルロース酸素同位体比年代測定法など、いくつもの年代値を束ねて照合しつつ、客観的な参考とする。そんな姿勢である。要は、大学などにも「年代学」といった枠組みで、歴史現象に年代を求める学問のダイバーシティを教える講義が必要なのである。大学教育や社会に文理融合が叫ばれる昨今であるが、この年代の問題に関しては、文理は協力し合いつつもまだ垣根が厳然とあって、互いに両分野を睨むといった溶け込み方、客観性には欠ける。かく言う私もそういう立ち位置にはなかなか向かっていないが、努力は続けている。一五回ある大学院の「考古学研究」の講義では、考古年代と科学年代の体系、方法論、実年代との関係、年代の本質、研究の流れなどを教える「年代学」のような講義内容を二回くらい割り、可能な限り対立的なものではなく、より真相に迫る整合性を求めることの一環として、その枠組み同士の相互理解の大切さを教えている。

さて、昨今急速に問題化した庄内式土器が使用されている実年代は、中国史書上に表れる「事件年代」を特定化する暦年を有し、歴史上では定点的な年代も含み込むため、大変議論を生んでいる。そして、邪馬台国問題、邪馬台国論争とも大きく触れ合うため、争点も多く、成り行きに対する一般の関心も強い。例えば、庄内式土器開始の年代一つとっても、異説を唱える考古学者は数多く、私の分類では少なくとも六〜七類型に及ぶ。東アジア史としても重要な時期だけに、こうした事態には驚きを禁じ得ない。紙面をいただいた小稿では、考古年代が単なる相対年代ではなく、実年代を意識しつつ設定されていることを明らかにしつつ、「邪馬台国の時代」の分期問題とその考古年代の提示に力点を置くが、今号はその触りとした。主題に関わるささやかな提言は既に述べたので、副題とした点への議論に入る筆を進めよう。

期区分の不可欠な「邪馬台国の時代」

「邪馬台国の時代」と言った場合、三世紀前半を中心とする時代に限って使われることが多い。それは多分に中国史書の取り扱いによるところが大きい。それは狭義の邪馬台国の活動期を捉えていることである。卑弥呼登場以前にも、当然邪馬台国は存在したと考える。それが広義に把握した場合の「邪馬台国第一期」である。卑弥呼が出身したクニであり、「今、使訳通ずる所、三十国」の一つである(以下、倭人伝と略記する)。倭人伝には、「倭人は帯方の東南の大海の中」とみえるので、この情報は、帯方郡の成立、西暦二〇四年を上限とする情勢である。朝鮮半島において公孫康が楽浪郡を分割して帯方郡を設置したのが二〇四年であり、それ以前ではあり得ない。公孫氏は一九〇年に黄巾の乱の社会混乱期に度(遼東太守)が独立して半島の二郡(遼東・玄菟)を領し、二〇四年に死去する。しかし、それ以前にも邪馬台国は存在しており、三世紀初頭に突然登場したわけではない。

さらに、邪馬台国は卑弥呼という司祭者であり、為政者が出現したから、特筆すべき存在になったのであり、卑弥呼の共立といっしょに姿を現したわけではない。したがって、二世紀の共立段階以前にも邪馬台国自体は存立していた。ただ、その前身に相当する勢力は畿内ヤマト国であって、近畿地方中枢部に長期間(紀元一〜二世紀)盤踞していたという見方がある(近年の岸本文説)、その考え方を尊重した場合は、この時期が「プロト邪馬台国期」ということになる。無論、邪馬台国畿内説に立っての仮説と言えようが、その後半段階の中枢地、纏向遺跡の出現が二世紀前半に遡り、それを示す庄内式土器の出発点もこの段階にあるとする岸本説は、この間再検討を要すると批判されている。しかし、ヤマト国↓邪馬台国の変遷については、一応「プロト邪馬台国」から「邪馬台国第一期」への移行として容認され、卑弥呼(尊称)登場以前の邪馬台国の存在を考えている。

卑弥呼が擁立されて倭国王帥升以来の对中国大陸・半島の外交が代表権を得て始まる。それが「邪馬台国第二期」である。一八〇年代から始まり、公孫氏が滅亡する二三八年までと捉える。卑弥呼政権樹立後の治世前半期と称してもよい。倭国乱を契機としての卑弥呼の擁立の年代を後漢末期の混乱した社会情勢を踏まえても三世紀初頭まで下降するとみならず、寺沢薫説もあり、卑弥呼治世の始まりの年代は絶対的なものではないが、下ろしても一九〇〜二〇〇年の頃とみている。この年代までに近畿式銅鐸の遠隔埋納も完了し、銅鐸祭儀そのものが撤廃されている。

「邪馬台国第三期」は景初三年(二三九)の対魏外交の始まりから卑弥呼が逝去するまでの期間である。倭人伝の記載に準じ、三世紀のほぼ中葉までとしておこう。短い期間ながら、東アジア外交手腕を発揮した時期と言え、卑弥呼治世の後半期(全盛期)と呼ぶことができる。卑弥呼が死んでも邪馬台国は持続した。宗主権は台与に引き継がれたが、少なくとも二六六年までの対西晋外交の足取りが掴める。これを終着に邪馬台国が消えたとはみずに、倭国の二代の女王を在位させてきた出身国としてあり続けたと考える邪馬台国は、史書の上で消息不明になっただけで、それ以降も存在し続けた。いわゆるヤマト国との同質性が議論すべきこととして残るが、二六六年以降も容認して、便宜上はこれを「邪馬台国第四期」とみなしている。台与以降については不分明ながら、一応崇神即位の三二三年までが第四期である。西晋外交の途絶の画期や、西晋が三國期から続く呉を滅ぼした二八〇年も小画期が認められ、関川尚功が重視する八王の乱や三二六年の西晋滅亡も東アジア政争の節目としては大きい。邪馬台国政権↓ヤマト政権への動きが加わる変革期であり、第四期はヤマト王権との複合期間が当然見込まれるが、倭国という別途、中国史書上に顕在化して発達の階梯を示すフレームの存在があり、卑弥呼も倭国王に推挙されたわけであって、邪馬台

女王とは言い難い。

以上、少なくとも二世紀から四世紀第一四半期までが邪馬台国がなんらかの態をなして持続したとみる。その間にいくつもの段階変遷を想定してみたが、これらは曖昧な部分を残すにせよ、暦年によって一定の枠組みが与えられる。繰り返すが、卑弥呼は邪馬台国の女王になったのではなく、共立を前提として一貫して倭国の女王の位に就いたのであり、中国認識は倭国との交渉が始まったことを記している。しかしながら、女王国は邪馬台国の代名詞として登場する部分が確かにある。「女王国より以北には、特に一大率を置き、諸国を檢察せしむ。」といった表現(倭人伝)はそれを示唆する。倭国は、『後漢書』に「倭国王帥升ら」とあって、一〇七年段階から首長層連合を既に束ねる動きが容認できるが、クニグニの代表権は数十年後の共立後の卑弥呼が断然上になったと憶測される。帥升の時代に邪馬台国なるものが遡るか否かは全くわからないことであるが、帥升晩年の頃には、庄内式土器の登場や纏向遺跡の出現を考える複数の研究者も存在する。したがって、卑弥呼共立以前の邪馬台国に関し、私は一期として分離しているが、前述したように、ヤマト国を充てる方もおられてよい。ただ、その場合は、纏向遺跡や庄内式土器などの開始点がヤマト国から邪馬台国の推移の中で説明されるわけであり、庄内式土器の初現年代が大きく絡むことになる。

邪馬台国は自然消滅したわけではなく、例えば北近畿、近江南部のような場所にあったとすれば、倭国の政治体制下で機能し続け、第二・三期はもちろんのこと、第四期においてさえ、卑弥呼出身母胎の土地として形骸化しつつも何らかの政体を保っていた可能性がある。最近、唱えつつある考古学代的な「原倭国」圏の枠組みが弥生時代の後半期に一定の形成をみたことが、倭国の本格的統合に少なからず役割を果たしたという自説の検証をさらに続けていきたい。

会員投稿 (アイウエオ順)

卑弥呼の死は告諭が原因

近畿東海支部会員 飯田 眞理

「倭女王卑弥呼與狗奴國男王卑彌弓呼素不和遣倭載斯鳥越等詣郡說相攻擊遣塞曹掾史張政等因齎詔書黃幢拜假難升米為檄告諭之卑彌呼以死大作家徑百餘步：」「卑彌呼以死」の解釈が問題です。多数派の説は「既に死んでいた」ですが、それなら一連の事柄を説明できません。倭国は鳥越等を郡に詣でさせました。それで帯方郡太守は張政を派遣したということ。詔書や「告諭」には女王卑弥呼向けの内容もあつたでしょう。「既に死んでいた」なら、張政は卑弥呼の死を知らされずに告諭したことになり、それはあり得ません。告諭の前に卑弥呼の死を記したはず。さらに、難升米に詔書と黄幢を拜假したことも卑弥呼が生存していたことを示唆します。卑弥呼は「告諭によって死ぬことになった」と解釈するほうが、文の前後関係に合うものです。実際、三国志での「以」は、ほとんどが「・によって」の意味で用いられているとのこと。『既に』との意味の唯一の例が孫権伝にありますが、例外的なものです。筆者も東夷伝中の「以」を調べました。三例を記します。

◇烏丸鮮卑東夷傳序文「舉漢末魏初以來以備四夷之變雲（漢末魏初以來の）を挙げ、以って四夷の變に備えるのである。」

◇鮮卑伝「素利死子小以弟成律歸為王・（素利が死んで）子供であった。以って弟成律歸を王と為し…」

◇倭人伝「自為王以來少見者以婢千人自侍、（王位に就いて）以来会えるものは少なく以って下女が千人その側に侍り…」

★三例とも「以」は「・によって」の意味で記されています。死に方はわかりませんが、「以死」の直前に記す「告諭」が

原因で死ぬことになったのは間違いなことと考え、「既に死んでいた」との解釈は、推察するに「倭国王が帯方郡の意志によって交替させられるようなことはあるはずがない」との先入観が元にあるように感じています。

全邪馬連に願う「共通認識」の確立と「周旋」の解釈について

伊藤 雅文

邪馬台国研究には何より「共通認識」が必要だと思えます。邪馬台国については多くの方々が様々な角度から研究されています。そうすると、議論がうまく噛み合わずに論戦も深まらなわけです。「共通認識」の確定が非常に困難であることは理解しているつもりです。それを承知で、各分野の先生方が特別顧問として名前を連ねておられる全邪馬連にリーダーシップを発揮してほしいと期待します。

近年、「邪馬台国への水行・陸行の出発点が帯方郡である」という読み方が流行っていますが、果たしてそのような読み方ができるのか？ とか、一里は何メートルなのか？ 卑弥呼の墓は前方後円墳なのか？ などについて、各分野の専門知識と最新情報を駆使して、一気に「共通認識」化は無理としても、現時点での一定の方向性を示していただきたい。全邪馬連にはその舵取りをする責任があるのではないかと思います。

そして、私が個人的に「共通認識」になつてほしいものに「周旋」の解釈があります。これは、拙著「邪馬台国は熊本にあった！」の中で検証し、全邪馬連にも論文投稿しているものですが、「周旋」は「めぐり歩く」「転々とする」という意味であり、決して「ぐるっと一周する」という意味ではありません。『三国志』内には23ヶ所の「周旋」があらわれます。うち「魏志倭人伝」部分の一つを除く22ヶ所では、一ヶ所も「ぐるっと一周する」という意味で用いられていま

せん。『三国志』にはそういう用法はないのです。

これが「共通認識」になれば、「周旋可五千余里」は、狗邪韓国から邪馬台国までの「めぐり歩いた距離」となり、帯方郡から狗邪韓国を七千余里とする尺度のもとでは、畿内まで到達することはありえません。つまり、邪馬台国畿内説は成立し得ないことになるのです。

古代史研究ノーベル(脳鈴)賞を？

尾関 郁

賞金はジャンボ十億円とはいきま……

三国志は魏略を元に行っているとされていますが、その魏略は何を元に行っているのでしょうか。「略」や「会要」が付いている古文獻は種本の短縮版ですから、魏略の種本は何かテーマです。お分かりの方には私的ノーベル(脳鈴)賞を贈ります。応募の方は種本名と根拠、住所、氏名、全邪馬連会員番号、振込先等を練馬区旭町二二四―二八までお送りください。一番早く蓋然性の高い解答を送られた方に賞金としてネットや携帯をしていない経費の節約分十万円を贈呈します。種本を探す手掛かりに自家製の古文獻一覽表がお役に立てばとても嬉しいですね。まだ入手されない方は、葉書に八二円切手三枚を貼って当方へ送って頂ければ郵送します。

ところで漢書に、なんと後の時代の魏略が引用されているのを「存知でしょうか。理由、それはクイズです。漢書を見れば直ぐわかりますので、賞金はなし。

この企画に賛同されて賞金を上積みしていただける方、あるいは自分で○○賞(テーマの有無は自由)を設置される方、大歓迎！ いっしょに全邪馬連の活動、しいては古代史研究をもっともつと活性化させましょうヨ。

わが図書を語る

「古事記日本神話の故郷は玄界灘の島々だった!」

「神話を伝承と科学で読み解く古代史論」

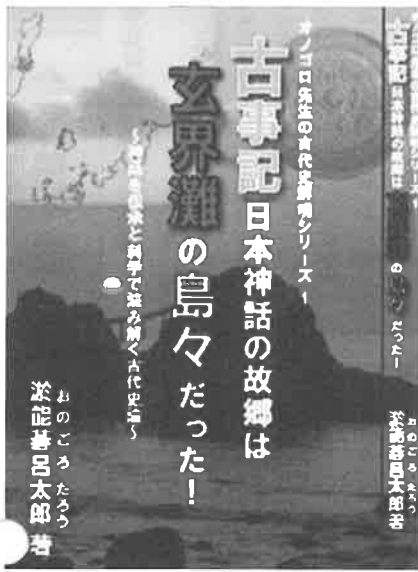
1500円(税別)

(株)ドリームキングダム 漆能甚呂太郎著

筆者は中学校理科教師であり、福岡県玄界灘の孤島である小呂島に赴任することとなった。そこで小中学生と行った植物調査や古代測量法の実験をきっかけに、小呂島の謎の古代史研究に取り組みこととなる。

古代天皇家が、最も重要視した植物であるビロウ(ヤシ科)自生地分布から、小呂島が古代の祭祀対象だったと推定した。さらに、古事記の国生み神話の記述と照合して、小呂島と能古島の合名が、日本神話で最初に登場する、オノゴロ島であると比定した。また、伊邪那美命が生んだ島のうち小六島が全て、玄界灘の島々であることを解明した。

本研究は、九州限定の歴史雑誌「忘却の日本史」での連載企画「小呂島と国生み神話の島々」(6号から13号まで)をまとめ、「オノゴロ先生の古代史説明シリーズ1」として刊



行したものである。本研究を第5回個人研究発表会で発表したところ、投票により1位を獲得し、平成29年の東京地区講演会で講演した。

本書の特徴は、

- 1 現役理科教師による古代史探求本であること
- 2 古代人の測量法を実験により推定していること
- 3 神話は事実根差し脚色されたものとし、国生み神話は玄界灘の出来事だったことを立証していること
- 4 立証の方法として、古事記・日本書紀の記述のみならず科学的考察を加え、推論していること
- 5 特に遺跡や神社の所在地やその方位について、検証した結果をYahoo地図で確かめられるよう、地図アドレスを記載していること

史上初、国生み神話の起源を科学的に考察した本である。これは、今後の邪馬台国所在地解明にとって、大きな鍵となるはずである。

『卑弥呼の墳墓を発見』
— 邪馬台国は半島に —

アマゾン電子著書 1055円

茅 出彦

10年前に半島の山中で百人近い殉死者を内蔵した20数mの円墳の内部資料を見た。これは卑弥呼の墓だと閃いた。これを追及して得た事実が倭国は金官加羅国(天照神が開いた)のことだった。列島は空き地の広がるフロンティアであった。海を渡り日本に行く倭人(米を作り)が激増していた。出雲ではスサノオ一家が国作りをしていたが天照系がそれ自分たちの管理下に置こうとした。国譲りでスサノオの生まれ故郷の高霊に追い返された出雲の人たちは職・住・食料がなく困窮してしまつた。これを鉄の製造で救済し豊かな国に仕上げたのが卑弥呼であった。

卑弥呼の墳墓を発見

邪馬台国は半島に



邪馬台国が大伽耶国に成長して豊かな大軍事国家「倭国」に発展した。日本へ鉄を大量に送り込んで繁栄の大古墳時代を迎えた。

距離単位1歩は23cmのことで現代日本人の歩く距離の常識150cmではないことを証明しています。

日本の揺籃期は半島先端部にあった伽耶国であり九州でも大和でもありません。

編集局だより

全国邪馬台国連絡協議会特別顧問の金関 恕先生がご逝去されました。金関顧問には会報四号に「ガラスの腕輪」のご投稿をいただきました。ご冥福をお祈りいたします。

今回も顧問の先生と会員から多くの投稿をいただきました。御礼申しあげます。

*

さて、前回のクイズ「写真の地図」はどこか、の解答を発表します。「写真の地図」は徳島県名西郡神山町にあります。

